

田中 泯 (1945～) 研究

－ 農耕実践と並行する舞踊活動を中心に－

お茶の水女子大学大学院 李 世珍

I 研究目的

田中 泯 (1945～) は、舞踏というジャンルに属しながらも^{*1}、その中では見られない独特な舞踊世界を確立している。それは、山梨県敷島町本村に拠点を置きながら、農耕実践と舞踊活動を融合、自然と深く感応する独自の舞踊の境地を拓いていることである。本研究は、このような農耕実践と並行する舞踊活動からみる田中泯の舞踊思想について考察することを目的とする。

II 研究方法

本研究は、書籍、雑誌、新聞記事、公演プログラム、スペース plan B 発行の機関紙等の文献資料とともに、筆者が体験した〈ART CAMP 白州〉や田中泯主宰のワークショップ〈身体の夏・学校〉の参与観察、等のフィールドワークを基に、舞踊思想を明らかにしたものである。

III 考察結果

1. 田中泯の舞踊活動と実際 (1964～現在)

《第Ⅰ期：モダンダンスから独舞へ(64年～81年)》

第Ⅰ期は、クラシックバレエとモダンダンスの活動を経て、舞踊の源泉を探る独自の舞踊活動を中心とする時期である。

《第Ⅱ期：コラボレーション・そして舞踏との出会い (81年～85年)》

第Ⅱ期は、国内外の音楽家、美術家達とのコラボレーションを活発に行う時期である。さらには1984年、独舞公演1501回記念公演を土方巽に構成・振付・演出を依頼し《恋愛舞踏派定礎》と題した公演を行い、「舞踏の系譜」に名乗りを上げる。

《第Ⅲ期：農業を実践する舞踏家として (85年～現在)》

第Ⅲ期は、山梨県白州町に拠点を置き、〈身体気象農場〉を開き、農業を始めた1985年から現在までである。ここでは農業と共同生活を軸とした創作活動に取り組み、さらに、幅広い活動が行われる。

2. 農耕実践

田中泯の舞踊活動の中でも第Ⅲ期の活動、つまり農耕実践と並行する舞踊活動はこれまでの舞踊のジャンルには見られない田中泯の独自性であると考えられる。身体を基点として活動する田中泯にとっては、現代社会の中で多数が求める自動化や単純化より「退行」する(手動化や複雑化)ことが必要であったと考えられる。ここで、「退行」

することとは、歴史的にさかのぼることであり、そのことによって身体本来の姿を取り戻す。なぜなら、その身体本来の姿の中に「踊り」という表現が発生する動機や創造活動の目的が潜んでいるからである。田中泯が考える本来の姿とは、豊かな感性と自然に生まれてくる本質であると言える。

彼にとって農耕実践は、自然から遠ざかってしまった身体が失ったものを自然へと近づくことで取り戻すという具体的な方法であると見ることができる。したがって、農耕実践を伴う創造活動は、大きく田中泯の舞踊活動として捉えることが出来る。

IV 結論 一田中泯の舞踊思想

① 始源回帰

・田中泯は、様式化された芸術としての舞踊にとどまることなく、「踊りの発生」に意識を置き、生命体の表現としての「踊り」を求める。

・それ故に、農耕実践とは、本来自由であった身体の動きや知覚の在り方を探り出す学習と実験の場となる。

② 解体・再構築

・身体本来の姿を取り戻すことにより創造の動機となるものを探す。そこから現在に存在する社会、舞踊、身体等のあらゆるズレを見直す。

・そして、農耕実践と並行する舞踊活動から得た身体の経験を「再構築」することで、新たな創造へとつなげる。

以上から、田中泯の舞踊活動の根底には「始源回帰」という発想が根差しており、田中泯は農耕実践と並行する舞踊活動から得る身体の経験を「解体・再構築」することで、新たな創造活動を行っていると言える。そして「始源回帰」という舞踊に対する考え方と「解体・再構築」という方法論を田中泯自らの言説を通して表現すると「退行」という概念で集約できる。

*1 田中泯は『舞踏の系譜』(作成者:國吉和子, 1995年/改定1998年)の中で「恋愛舞踏派」として位置付けられている。

【主要参考文献】

1. 1979 田中泯・松岡正剛, 『身体・気象・言語』
2. 1980 田中泯 「すぐ隣にむけて」: p p 64-69
3. 1991 田中泯・大輪武三, 『農具と身体』『すき・くわ・かま』, I N A X 出版
4. 1997 國吉和子 「田中泯の舞歴について」『ムンク生命の踊り』日本文化財団, 東京: p p 6-7